
傭兵の国盗り物語 短編集

ドラキュラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傭兵の国盗り物語 短編集

【Nコード】

N8710W

【作者名】

ドラキュラ

【あらすじ】

5大陸の中に在るサルバーナ王国。

そこに住む男女たち。

ここに書くのはその男女たちの日常生活である。

私の王子様（前書き）

どうもドラキュラです。

この度、傭兵の国盗り物語の短編集を書く事にしました。

他の作品を投稿しないで何をしているんだ！！と言うでしょうが・
・そこは勘弁して下さい。（汗）

一応、ちゃんと書いておりますから・・・今は溜めているいるんです。

今月中には纏めて投稿したいと思います。

こちらは不定期投稿ですが、月に1回できるようにしたいと思いますのでよろしくお願いします！！

私の王子様

突然だけど『眠り姫』って知ってる？

話の内容は魔女によって眠る事になった姫が王子のキスで目覚める話。

子供の頃は私も寝ていたらきつと王子様が来てくれるって思ってたわ。

まあ、そんなものあくまで絵本の中と諦めていたけど・・・違っていたのよね。

これが・・・・・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・起きろ。朝だ」

私はシート越しに揺さ振られて目を覚ましたけど、眼は閉じてわざと寝ている振りをした。

だって、眠り姫は王子様のキスで目覚めるんだから。

「おい、起きろ。起きんか。朝だぞ」

「んんっ・・・・・・・・」

敢えて私は揺さ振る腕から逃れて寝返りを打った。

「・・・・・・・・起きんかつ」

早くも痺れを切らした私の王子様に私は嘆息した。

何でこうも短気な王子様なんだろう……………

でも、それは最初だけ。

「……………」

揺さ振るのを止めた手は寝返りを打った私を自分の方へと向かせる
と……………

チュッ

唇に温かい感覚が来る。

「んっ……………」

私は薄らと眼を開けた。

「やっと起きたか。馬鹿ものが」

目覚めた私に馬鹿ものと呼ぶ人物は私より20も年上の男。

骨と皮で構成された身体に頭は寂しい限りで外見は最悪と言って良
いでしょうね。

おまけに癩癩持ちで我儘だし意外と嫉妬深い。

でも、私には彼が…………眠り姫に出て来る王子様なの。

趣味が悪いと言うでしょうけど、優しい所もあるし家族サービスも良いのよ？

まあ、私がある程度は“仕込んだ”けど・・・お陰で他の牝共にもまで好かれるから気に食わないわ。

もっともこの男が浮気なんてしないってのは知ってるけど。

「ほら起きろ。朝飯は出来ているぞ」

「持って来て」

「馬鹿を申すな。病人じゃないだろ」

「だって今日は休みでしょ？」

「そうだ。だから、朝飯を作り掃除をしたんだ」

洗濯も干した、と王子様は言った。

「だったら良いじゃない」

昨日は王子様に可愛がられて腰が動かないの。

「・・・待ってろ」

これを聞いた王子様は背を向けてドアから出て行った。

私は王子様が居なくなってから笑顔になった。

「・・・本当に優しいんだから」

ああ見えてちゃんと持って来るのが優しい証拠。

今日は休みだしどうやって過ごそうかしら？

2人切りで一日中、家に籠るのも悪くないけど外に出て散歩するのも良いわね。

「何を一人でニヤケている」

あら、もう来たんだ。

王子様は盆に載せた料理をベッドの直ぐ近くのテーブルに置いた。

「後は自分で食え」

そう言ってまた背を向ける王子様の服を私は掴んだ。

「食べさせてよ」

「貴様は赤ん坊か!!」

「怒鳴らないでよ。そんなじゃ将来・・・父親になった時困るわよ?」

「ま、まさか・・・で、出来たのか?」

「まだよ。もしかして欲しいの?」

「ッ悪いか!!」

唾を吐きながら王子様は怒り出した。

でも、直ぐに怒るのを止めて腰を降ろした。

それからスプーンで料理を掬うと私の口に運んでくれた。

「まったく何て我儘な女だ」

ブツブツと文句を垂れながらも王子様は私の口へ運んでくれる。

「ほら口を開けろ」

「あーん」

私は口を大きく開けて料理を食べた。

「どうだ？美味しいか」

高圧的な態度で訊ねてくる王子様に私は頷いた。

それから王子様は私に食べさせてくれた。

「食器を洗って来る」

王子様は盆を持ってまた部屋を出て行った。

一人になった私は天井を見ながら右手を掲げた。

右手の薬指には・・・金色に輝く指輪が嵌めてある。

これを嵌めたのは5大陸が統一されてから直ぐの事。

私の王子様もあの戦いには参加した。

もちろん兵としてではなく総大将として、ね。

話によれば弾丸が当たって重傷を負ったのにその場で怒鳴り散らして怯む味方を鼓舞したと聞いている。

お陰で牝共が心時めいてしまったわ。

勝利の宴の時なんて・・・思い出すだけでも胸糞悪いほどモテモテだったんだから。

それから直ぐに私はこれを渡された。

その時の言葉は今でも忘れない・・・・・・・・

『そなたみたいな女など誰も娶らん。故に私が娶ってやる。有り難く私の妻になれ』

何とも・・・こんな高圧的な求婚の言葉があるの？と呆れ果てたわ。

でも、それは最初だけ。

後の言葉は・・・・・・・・

『私は……そなたの事が、……その、何だ……あ、あ、あ、……愛している……私のような男ではそなたの夫など名前倒れかもしれん。だ、だが、そなたを……幸せにしてみせる。いや……そなたと一緒に幸せな家庭を築き上げたいのだ。私の……生涯を共に生きてくれ。頼む』

って、こう言われちゃったの。

いやー、今思い出すだけでも感激するわ。

あんな言葉を言われたんだもの。

女なら誰だって喜ぶでしょ？

好きな男から言われたんだから。

で、話を戻すと……結婚したのよね。

場所は新しい都……まあ、前の首都と言えば良いかしら？

ヴァイガーで挙式したわ。

新しい国王様達などが立会人となって大司教様が司会を務めた。

そして私と王子様は晴れて夫婦となったわ。

と言っても私が強引にあいつを捕まえて同棲を始めたからアツアツでも何でも無い。

でも、幸せだし新鮮なのよね。

あーあ、何だかまた眠くなってきた。

また寝ようかな？

そうすれば、また王子様がキスをしてくれるんだから。

眼を閉じると直ぐに眠れた。

知っている？

眠り姫は王子の口付けで目を覚ますのよ？

私の王子様は骨と皮で構成されて癩癩持ちな上に髪の毛がお寂しいという酷過ぎる上に老けた王子。

でも、そんな王子が私は好きなのよね……

「食べたらまた寝るか……」

私は食器を洗い終えて部屋に戻って見るとベッドではスヤスヤと眠る……妻が居た。

結婚する前から決めていた事がある。

日によって食事や掃除などをやる。

やらないと罰を与える。

宰相である私にこんな事をさせるのは目の前で眠るこの女ぐらいだ。

「まったく。赤ん坊じゃあるまい……………」

起きたら食べて寝る。

いや、赤ん坊でも動くか。

それなのにこの女と来たらベッドから動かない。

幾ら仕事が休みとは言え…………まあ良い。

私はベッドに近付いて椅子を引き腰を降ろした。

今日は仕事が無い。

どう過ごそうかと迷っていたが……………

「そなたの寝顔を拝見するでしょう」

ベッドで眠る妻はまるで赤ん坊のように無邪気だ。

日頃からこれくらい無邪気なら…………いや、駄目だな。

これだけ無邪気では他の男共に奪われてしまう。

この無邪気は・・・私だけが独占するのだ。

まったく私のような男の何処に貴様は惚れたのだ？

私など骨と皮しか無い身体だし髪の毛だって・・・育毛剤を付けているのに効果が得られない頭だ。

その上癩癩持ちで歳も離れている。

唯一あるとすれば・・・宰相の地位位だ。

だが、この女から言わせれば宰相だろうが関係ない、と言うだろうな。

「そなたほど酔狂な女は居ない」

私が死ぬと言え、自分も死ぬと言った女だ。

本当に酔狂な女だ。

しかし・・・愛おしい。

この女を妻に出来た事は私の誇りだ。

妻の髪を撫でながら右手に嵌められた指輪を見る。

私が初めて渡した物。

まったく飾り気のない指環で新しいのに変えると言ってみたが断固として断った。

『あんたから貰った物よ。初めての、ね』

そんな物を変える訳ない、と言われた時・・・嬉しかった。

普段は傲慢で直ぐに手が出るし毒を吐く妻だが・・・今は可愛い。

「今日はそなたの寝顔を見るだけで十分だな」

私は日が落ちるまでずっと妻の寝顔を見続けた。

お人形と無線（前書き）

本編の第百八十一章の別物です。

こちらは少しガリシャの悪戯が出ています。
W
W
W

お人形と無線

フィーナ中尉達を逃がし殿を務める事になった私達だが何とか馬の居る場所まで到着した。

既に辺りは暗く夜となっているからワイバーンの追撃は来ない。

追撃が来ないのは有り難いのだが、更にまた進まなければならないと思うと気が重い。

殿を務め更に逃げたから体力を使い息も荒くなってきたから少し休憩を挟みたい所だ。

「少し休憩するか」

軍曹は私達を見て休憩を挟む事にした。

これは有り難く直ぐに私達は地面に腰を降ろし荒い息を整え始める。その一方で馬達は雪を掻き分けて地面に生えている草を食べ始めている。

見ればあちらこちらが掘り返されているから私達が待っている間に食べ続けていたと判る。

「よく食べる馬たちだな」

軍曹のまったくその通りだ、と私達は頷く。

だが、距離を考えれば今の内に食べておこうという考えだと思う。

それに倣うように私達も携帯食料を取り出して軽い食事を開始した。

「ワイバーンが夜は動けなくて助かるぜ」

お陰で追手は歩兵だけという事になる。

だが、今の所はそんな気配も感じないから問題ないだろう。

「これから少佐に偵察の報告をしてどうするんですか？」

まさか敵が前線基地を造るまで待つなんて事は無い筈だ。

「嫌がらせはする。他には・・・首都に偵察するかもな」

「私達が、ですか？」

「かもしれん。ヴィールングのおっさんが指揮する兵たちは顔が知られている」

更に言えばフィーナ中尉達が少佐達を救出した事を考えると警戒は前以上に厳重となっているだろう。

となるとやはり嫌がらせだけになる可能性が高いな。

下手に侵入して捕まりでもすれば少佐がされたように拷問される恐れがあるのだから。

「まあ、旦那の事だ。そこら辺は考えている事だろうぜ」

司教様も居るんだ、と軍曹は続けた。

確かに司教――エドリアス大尉なら少佐同様にこれからの事をもう考えている事だろう。

前線基地を敵から奪った後の事なども既に。

あの方の知識は半端ではないからこうして作戦を考える時に役立つ。司教という職業にはまったく不向きで寧ろ学者などの方が本人も言った通り向いている。

「しかし、俺達が来た事を知られたから・・・向こうも急ぐかもしれない」

軍曹は肉をフォークで刺すと口の中に放り込みながら敵の基地造りは更に急がれると言った。

私達が来たのだからもう少しスピードを上げて作業に取り掛かる可能性が高いのは頷ける。

それならそれで構わない。

寧ろ急いで造って欲しい。

そうしたら、私達が奪い取って有効に使わせてもらうのだから。

そんな事を思いながら私は高カロリーの戦闘食を口にしようとした。

そこで無線が鳴った。

ガラムこと猟犬が背負う通信機だ。

「こちら猟犬・・・・・・・・・・」

猟犬は受話器を取るとコード・ネームを名乗ってから、直ぐに嬉しそうに尻尾を振った。

あれを見れば相手が誰なのか判る。

「これは我が主。如何なさいましたか？」

猟犬を従えているのは少佐だ。

その少佐から無線を受けたのだから尻尾を振りたくもなる。

しかし、直ぐに不機嫌な顔になり私を見た。

な、何で私を睨むんだ。

私は何もしないぞ。

「・・・貴様にだ」

猟犬は犬歯を剥き出しにして私に受話器を差し出した。

「まったく。なぜ貴様ばかり・・・・・・・・・・」

そんなこと言われても困るのだが・・・・・・・・・・

心の中で獵犬に言いながら私は受話器を受け取る前に相手は少佐か？と訊ねた。

獵犬はぶつきら棒に綺麗なお人形から、と返答した。

「……お人形、ね」

山犬の眼つきが鋭くなり……何故か刺す勢いで私を見てくる。

「私、何もしないよ？」

獵犬と言いついで私をそんな風に見るのか理解できない？

「別に………」

山犬は素っ気なく答えて戦闘食を食べ始めた。

私は訳が解からないまま受話器を耳に当てた。

「こちらリンクス」

『……ランドルフ、ですか？』

声の主は透き通るように綺麗な声だった。

この声はエリーナ様だ。

まあ、綺麗なお人形からと言われた時点で何となく察しは付いていたが。

「エリーナ様。何か用、ですか？」

『いえ、ただ、眠れなくて歩いていたらテツヤ殿と会いまして・・・』

それで連れて来られて私と会話でもしろ、と言われ無線機を渡されたと言う。

『あの・・・迷惑、でしたか？』

受話器越しにエリーナ様が気不味そうな感じで喋る姿が頭に浮かんだ。

「い、いえ・・・そういう訳ではありません。寧ろ嬉しいですよ」

山犬の視線が更に強くなり背中越しにグサグサと刺さる・・・

私が何をしたんだ・・・？

『・・・そう、ですか。でも、これは便利ですね』

遠くからでも会話が出るのだから、とエリーナ様は言ってきた。

「はい。ですが、お遊びで使う道具ではありませんからね」

これに味を占めて毎回こんな事をされては堪らないから釘を刺して置いた。

『分かっております』

私の言葉に些か怒った口調でエリーナ様は返しながら、今度は少し控え目に喋ってきた。

『あの、また・・・約束しても、宜しいですか？』

「約束？何でしょうか？」

またもや山犬の視線がキツクなるが、私は敢えて無視する事にした。

『今度・・・帰って来たら、私とお食事を一緒に・・・して下さい』

以前から何度か誘われたが、その度に私が断った。

今度こそは、と食事をしたいとエリーナ様は言われた。

「へえ・・・王女様と食事ねえ・・・」

山犬は私の背中――肩に顔を預けて耳元で囁いてきた。

「ちょ・・・山犬。今は無線中だよ」

「だから何よ。気にしないで会話を続ければ良いでしょ？」

軍曹達に助けを求めるが・・・他人が困っている姿を見て楽しんでいる人に助けなど求めても意味が無かった。

『どうか、なさいましたか？』

「いえ。別に何も・・・うわっ」

私は思わず悲鳴を上げた。

山犬が耳元に息を吹いてきたのだ。

「へえー、あんたって耳弱いんだ」

面白い物を見つけたとばかりに山犬は笑ってきた。

「山犬。好い加減にしないと怒るよ」

私は受話器を胸に当て山犬を睨んだ。

直ぐ近く・・・キスが出来そうな距離だが今は怒りの方が強く気にしなかった。

「あんたに怒られる筋合いなんて無いわ」

「ある。私は無線中だ。それを邪魔するのは止めてくれ」

「邪魔してないよ。ただ、あんたが“さっきの質問”に答えてくれないから自分で調べてるだけだよ」

「・・・・・・・・」

これを言われては何も言えない。

さっきの質問とは例の事だが、あんな質問に答えられる訳もなく答

えなかった。

それを今頃になって蒸し返されては閉口するしかない。

何より山犬に説教しても彼女の眼を見れば何を言っても無駄だと判る。

仕方無く私は諦めて無線に集中する事にした……………

それが癪に障ったのか山犬は私の肩に顔を載せて…………隅々まで手などを回してきた。

「おー、逆セクハラとは羨ましい」

茶化すように軍曹は言ってきた。

「おい、イーグル。茶化すなよ。それから山犬。リンクスの言う通り今は無線中だ。もう止めろ」

フォックスがやっと助けてくれた。

「…………分かったわよ」

山犬は私の耳を今度は齧ってきた。

「ひいあ!!」

これに私は…………つい変な悲鳴を上げてしまった。

「可愛い悲鳴ね」

山犬は笑顔で私から離れた。

うううう・・・こんな悲鳴、オリガさんとの時しか出さなかったのに・・・

『ランドルフッ。どうかなさったのですか?!』

エリーナ様が悲鳴に近い声を出してきた。

「い、いえ。何でもありません」

『先ほど悲鳴を上げたではありませんかっ』

「本当に何でもありませんから」

約束は取り敢えず保留する、と言ってから無線を切った。

「山犬ッ」

私は山犬を睨んだが、彼女は知らん顔で食事が続けたが、私は説教をした。

まったくの無意味だったが・・・

王女との夕食（前書き）

第百八十三章の続き？みたいな感じです。

ランドルフが王女を泣かせてしまいます！！

王女との夕食

私はエリーナ様と二人切り・・・そう二人切りで食事をしている。

何でこんな状態もといこんな風に食事をする事になったのかを説明すると・・・・・・・・・・

『騎士として王女様にも奉仕しないと駄目よ？』

私の“初めて”を貰ってくれた上に色々と助けてくれるオリガさんから言われたのだ。

それ以前に今夜は夜の女神であるミレーネ様と食事をするため家を留守にする。

私はそれだと一人で食事をする事になるから、こうしてエリーナ様と食事をしている。

とまあ大雑把な説明だがこんな所だ。

しかし、腑に落ちない。

何で私が王女であるエリーナ様とこうして食事をしているのか？

まったく・・・分からない。

理解できない。

普通に考えるとそうではないか。

特別私は容姿が良い訳でも育ちが良い訳でも無い。

ただの一階級の平民であり見習い騎士であり一等兵だ。

それに腑に落ちないのがもう一つある。

使用人が居ないのだ。

ただの一人も。

普通ならワインを注いだり食べ終えた食器を片づける使用人が居る筈なのにどういう訳か居ない。

恐らく目の前で終始笑顔で居る可愛らしいお人形さん――エリーナ・ロクシャーナ王女が命令して追い出したのだろうな。

まだ15歳だからこういう我儘な所も王族とは言え大目に見られているのか？

それともこんな状態だからせめて物心遣いなのか？

どちらにせよ以前の私なら真っ赤で何も出来なかっただろうな。

そんな事を想像しながら私はワインを飲み続ける。

いま飲んでいるワインは白。

白ワインと相性が合うのは魚料理だ。

ここサルバーナ王国は全体を山に囲まれた国――山国だ。

だから、海の魚なんて物はシャインス公国から輸入してくるしか手に入らない。

所が今は内乱状態で、そんな事は出来る訳もないのは当たり前。

では、この魚は何か？という事になる。

目の前に出されている魚は中位と言えば良いだろうか？

何処の部分かは知らないが、白身が剥き出しになっており程良く焼かれている。

「この魚はここで獲った物ですね？」

そうでないなら何処で獲った物だと訊きたい所だ。

「はい。雪は降りましたが、魚は居ますからね」

「しかし、冬になると魚は活性力が衰えて見えないのでは？」

「ここに住んでいる方々は場所を把握しているそうです」

なるほど、と私は感心しながらナイフとフォークで白身の魚を綺麗に切り分けてから口へと運んだ。

それをエリーナ様は黙って見つめ続ける。

「私が食べる所を見て楽しいですか？」

あまり食事中に見られるのは好きではない・・・いや、そうではなくて好ましくないのだ。

オリガさんとは話しながら食べるが、この方とは何を話せば良いか皆目見当も付かないし何も喋らないから性質が悪い。

「ええ。ランドルフはどんな風に食べるのか、どんな風に飲むのか・・・見ているだけで楽しいです」

「そうですか」

敢えて私は気にしないで食べ続けた。

魚を食べてから白ワインを飲むと、口の中に魚と酒の味が一緒に広がり美味い。

「所でランドルフ・・・」

エリーナ様は白ワインが注がれた透明なグラスを右手で弄びながら私に訊ねてきた。

「何でしょうか？」

「貴方・・・オリガさんとはどういう関係なのですか？」

「どういう関係？」

「正直に訊きます・・・男女の関係はありますか？」

「・・・・・・・・・・」

私は耳を疑った。

何と言った？

この白と青を主体にしたドレスを着て金髪を垂れ下げた可愛い
お人形は・・・・・・・・・・？

男女の関係があるのか？

「どうなのですか？」

エリーナ様は私にもう一度訊ねてきた。

「・・・王女様である貴方様には、お訊かせ出来る内容ではありません
せん」

私は白ワインが注がれているグラスを手に取り口に運んだ。

「私は知りたいのです」

「では訊きますがどうしてですか？」

「それは・・・・・・・・・・」

「失礼ですが、私とオリガさんが男女の関係でしたらどうするんですか？」

「・・・・・・・・・・」

エリーナ様は何も言わなかった。

「やはり、貴方様と私とでは夕食は似合いませんね」

私は自分で何を言っているんだ？と思いながらも口は勝手に動いていた。

「今夜は大変貴方様には不快な想いをさせた事・・・誠にお詫びします。今夜以降は貴方様とは夕食をしないので勘弁して下さい」

こんな言葉を言えば普通に極刑物なのに口は勝手に動き身体も勝手に動いていた。

椅子を引き立ち上がろうとした。

「ま、待って下さいっ」

エリーナ様は慌てて立ち上がるとドアへ向かう私の手を取った。

「あ、貴方が怒ったのなら謝りますっ・・・で、ですから・・・」

「私は怒ってなどいません。貴方様を不快にさせたと思いここから出ようとするだけです」

「でしたら、私は不快になど思っておりません!!」

私は顔だけ振り返りエリーナ様を見た。

・・・白い真珠が溢れ出そうとしている。

「え、エリーナ様っ」

「う、うえっ・・・不快になど、思っていないません・・・ただ、私は貴方と食事がしたいだけ・・・なのに・・・」

「え？あ、いえ・・・ど、どうか、その泣かないで下さいっ」

今にも泣き出しそうなエリーナ様を私は思わず抱き締めた。

「ら、ランドルフ・・・・・・・・」

「わ、私も・・・あの、その・・・失礼な態度を取って申し訳ありませんでした。ま、またやり直しましょう！！」

王女を泣かせたなんて事が知られたら・・・この国に居られない。

それは嫌なので私は急いでエリーナ様を座らせ自分も腰を降ろした。

「あ、の・・・ら、ランドルフ・・・・・・・・」

「な、何でしょうか？」

私は先ほどの事もあり・・・出来るだけ優しい声で訊ねた。

未だに真珠を溜めているから・・・いつ泣くかわからない――導火線に火が点いた爆弾だ。

下手な事をすれば爆発間違いないので緊張するのは当たり前と言え

る。

「先ほどの話は忘れて下さい」

「分かりました」

私も先ほどの忘れる。

「貴方様は、身分違いの恋をどう考えます？」

「身分違いの恋？」

「はい。例えば貴族と平民、若しくは王族と平民などです」

「そうですね……」

身分違いの恋……よく女子向け特に幼い子には人気がありそうな恋物語だ。

「物語で考えるなら良いですね。現実的に考えるなら難しいですが」

「でも、実現できなくはないですよね？」

「まあ、周囲が認めるなら有り得なくは無いかと」

実際そんな事は滅多な事では有り得ない話だが。

「テツヤ殿は王族にも求婚されたのですよね？」

「ええ。ですが、身分違いという事で断りました」

実際の所は自分が彼の女性を幸せにできるのか不安で逃げたらしいが。

「そうですか・・・テツヤ殿がどう想っているのかは分かりませんが・・・恐らく求婚した相手は哀しんでいるでしょうね」

当たり前と言えば当たり前だ。

自分から求婚したのに断られたのだから。

しかも相手は王族。

王族の一員になれば何でも手に入る。

その半面で何かと堅苦しい生活を余儀なくされるが。

「テツヤ殿も堅苦しいのが嫌いだから断ったのかもしれないね」

強ち否定できない。

テツヤ殿は自由だ。

傭兵だからという訳ではなく本当の意味で自由なのだ。

だから、束縛されるのを嫌ったとも言える。

「私も・・・自由になりたいです」

自由に誰かと恋をして結婚をしたい・・・

「お母様は何時も言っておられました」

貴方には私のようにならないで。

「お父様とお母様は愛の無い結婚を強要されました」

だからこそ娘のエリーナ様にはそんな人生を送って欲しくないのだから。

「私も・・・自由になりたいです」

もう一度だけ彼女は呟いた。

その言葉には本当に願望――渴望している事が読み取れる程・・・溢れていた。

そして私はそれに対して何も言えなかった。

何と言えば良いのだろうか？

その後は・・・普通に夕食を終えた。

最初こそ不味い状況だったが、後からは楽しかった。

だが・・・何故かエリーナ様の言葉が耳から離れなかった。

無意識な花（前書き）

今回はサラが主人公です。

何時も傭兵の国盗り物語を読んで下さる方・・・ありがとうございます。

先日、足を骨折してしまいました。

更に彼女は間違いだったらしく・・・（涙）

ですから、後1ヶ月・・・今月中の終わりまではお待ちください。

別に手ではないから書けるのですが・・・実際続きは書いています。

ただ、フォース・リーコンの事をどうするか少し考えている最中なんですよ。

本当なら今は・・・な所が未だに敵対した上に見捨てられていない状況・・・

更に言えば、本当ならもう別の国に行っているのに話がまだ内乱中なので・・・

ネタばれとは言わないかもしれませんが、実は、地震を出す予定だったんです。

ですが、こんな状況でこれを出すのは些か不謹慎と思い自重して話がグダグダと長くなってしまった次第です。

300話・・・そうでなくても350話で内乱編は終わりにするよう
うに努力します。

それまで退屈と思いますが、寛大な御心でどうぞ見守って下さい。

・・・子供の名前、考えたのに。
(涙)

無意識な花

5大陸を統一した後・・・私は徹夜様と結婚し徹夜様は王となられた。

徹夜様が国王になってから第一首都であったヴァイガーに首都が移りヴァエリエは第二首都へと変わった。

と言っても私たちがここへ移り住んだだけでそれほど変わっていない。

徹夜様が国王になった事から私は女王の座を降り王妃という立場になったがそれで良いと思っている。

この方なら・・・リカルドも納得している筈。

私はあの子の最後を見届けていない。

でも、徹夜様は私にこう言ってくれた。

『あいつは良い男だ。これも母親のあんたの賜物だ』

それを聞いてリカルドは最後まで毅然として死んだんだと判った。

そして徹夜様はリカルドの想いを叶える為に地方にも眼を向けリカルドの為に“弔いの灯火”を灯してくれた・・・

それから私は徹夜様の子を産み他の王妃様と幸せに暮らしている。

だったのだが……………

「て、徹夜様……あの、一体……………」

私は訳が分からないままベッドの上で夫になった徹夜様を見上げていた。

「……………」

それに対して徹夜様は一言も喋らず黙って私を見下している。

徹夜様は丸太のように太い両腕を私の顔に挟んで固定した。

私を見下す黒い真珠は右目しか無いのに……その吸引力は計り知れず全て飲み込まれそうな勢い。

「……お前は前からそうだ」

徹夜様は私を睨むように見ていたが、僅かに間をおいてから呟いた。

無意識に“誘う術”を知っている。

「強請る術は知らないくせに……無意識に俺を誘う術を知っている」

夜の女神と姉妹だけある。

血は争えないな、と徹夜様は語り続けた。

「まったく。政務中に俺を誘って来やがって……………」

どうしてくれる？と言われたが私は身に覚えが無い。

「わ、私は別に誘ってなど・・・・・・・・・・」

私はただ政務中にこの方の部屋を訪れて茶でもどうですか？と言っただけ。

別に誘ってなどいない。

それ以前に誘う術など知らない。

誘うより強請りたかった。

私以外の妃は皆・・・・強請術を知っている。

何時も私だけが強請る術を知らないで・・・・他の王妃に弁上する形をしているだけ。

私だけ知らない・・・・私だけ仲間外れにされた気分・・・・・・・・

私だけが何時も皆が知っている中知らないで後から知る。

そんな私を尻目に徹夜様は「明日は仕事が大変だ」とぼやいた。

そう・・・・まだ時刻は昼。

本来ならまだ政務中で仕事は山のようにある。

5大陸は統一したが、別に全てサルバーナ王国の領土ではない。

少し領土は増えたがそれは互いに同意した物だし王妃がこちらに嫁ぐ時に持って来た花嫁道具の一部みたいなもの。

だから、領土に関してはそれほど政務は忙しくない。

ただ新たに首都を移動させた事、地方の声、軍事、経済など様々な問題がある。

それを処理しなければならぬから忙しい。

それなのにこの方は私を寝室に連れて来ている。

寝室に連れて来られてこの方がやる事はただ一つ……………

それを期待している半面で私は食い下がった。

「で、でしたら、私より政務を……………」

本当は…………この方に抱かれたい。

でも、それでは後が面倒…………だから、私は自分の気持ちを抑えて元女王として意見した。

「…………関係ない」

「で、でも…………んっ」

私は徹夜様に話し掛けたが、途中で遮断された。

この方の熱い口付けで・・・・・・・・

厚い唇が私の唇を全て覆い尽くし息が出来ない。

そしてとても熱い・・・・・・・・

「ん・・・・・・・・ふっ・・・・・・・・」

私は何時も口付けを受け止める方・・・・・・・・

自分からした事が無い。

眼を瞑り身体を硬直させる私を徹夜様は喉を震わせて笑った。

そして私の唇をゆっくりと味わい始めた。

舌が私の口内を蛇のように這いずり回り私の舌を絡めて遊ぶ。

されるがまま私は徹夜様に身を預け続ける・・・・・・・・

この方は私を弄んでいる節がある。

現に今も私は力が抜けて・・・長い口付けで息も絶え絶えなのに、口付けを続けて・・・激しくしている。

弄んで私が・・・どう乱れるのかを見ている。

薄らと眼を開ければ今だって私が苦しんでいるのを見て楽しんでい
る。

何時もそう・・・私が他の王妃と一緒になるのを見てもこの方は楽しんでるのだから。

・・・淫らな事なのにこの方が望んでいると思うと、自然とそれが出来てしまう。

『徹夜様・・・・・・・・』

私は心の中で名前を呼び続け、服を掴み、自らの身体を押し付けた。これが精一杯の自己表現。

徹夜様はそれに応えるように更に口付けを激しくさせた。

私は更に身体を押し付け徹夜様に翻弄され続ける。

やがて・・・長い口付けが終わった。

徹夜様は私の唇から離れた。

口が自由になったので勢いよく息を吸い眼を開ける。

開いた眼から・・・私と徹夜様の唇に銀糸の橋が出来あがったのが見えた。

銀糸の橋を掛けながら熱い吐息が触れ合う気がした・・・・・・・・

「て、徹夜様・・・・・・・・」

私は上気した顔と声で愛しい男の名を呼んで見つめた。

もう・・・駄目・・・

貴方様に・・・もっと翻弄されたい。

「・・・責任を取ってもらうぞ」

俺を誘った責任を、と徹夜様は続けて私を見下す。

「・・・はい」

私は身体が上気するのを感じながらも頷いた。

責任を取ります。

貴方が望むままに・・・この身を好きにしてください。

だから・・・私をどうか抱き締めて下さい。

離さないで下さい・・・

「良い子だ。タップリと“可愛がってやる”」

そして徹夜様の言葉に頷き・・・また口付けを甘んじて受け入れた。

昼間だというのに・・・夜のように“熱い時間”を私は徹夜様と過ごす事になった・・・

— — —

— —
「……ん」

私はベッドの軋む音で目が覚めた。

身体が重くて動かない……………

何とか顔だけを上げて窓を見れば……………もう夕方だった。

もう夕方……………ずっと私は……………

隣を見れば徹夜様は居なかった。

何処に行ったの？と思ひ僅かに顔を動かして探すと徹夜様は既に衣服を着た後だった。

背中越しでも逞しく見える。

私はあの背中に何度も爪を立て、肩に齒を当てたんだ。

徹夜様はそれを痛いとも思っておらず私を弄び続ける。

私が乱れる所を見ては口端を上げて笑い淡い口付けを落とす。

それが私は嬉しくて……………更に激しくなる。

何処へ行くの？と問い掛けたいのに声が出ない。

私が起きた事に気付いていないのかテツヤ殿はコップに水を注いで

いた。

それに布を巻き付けるとテーブルに置き部屋から出ようとした・・・

「・・・徹夜様」

私は掠れた声で背中に語り掛けた。

「何処へ、行かれるのですか？」

私を置いて何処へ・・・

また私を悲しませるのですか？

「仕事が残っている」

今日出来る事は今日やる、と徹夜様は背中を向けたまま答えた。

「お前は休んでいろ」

身体が動かないだろ？と言われ私は何も言えなかった。

「あの、この後は・・・」

政務が終わったら・・・

「また可愛がってやるよ」

あんなに私を翻弄したのにまた、私を翻弄させると徹夜様は言った。

「・・・・・・・・・・」

私は顔が熱くなるのを覚えた。

また、徹夜様に可愛がってもらえる。

それを口から言われると身体が熱くなる。

「覚悟しておけよ？俺をまた無意識に誘ったんだ」

その責任は、また取ってもらうと徹夜様は語った。

「・・・はい」

私はそれにまた頷いた。

そして今度こそ徹夜様は部屋を出て行った。

あの方は私を“花”と称している。無意識に虫を誘う甘い蜜を持つ花と・・・・・・・・・・

愛しい夜（前書き）

今度はフィーナがテツヤに抱かれる所を描きまして・・・ちよつとそのHな描写があります。

とは言っても別IDで投稿している小説よりはかなり抑えています。

何れこちらも出すか？と思っておりますが今は不明です。（汗）

愛しい夜

私はテツヤとメジュリーヌの2人と共にドアの前に立っていた。

ここはメジュリーヌの言葉を借りるなら「愛の巣」だ。

ここでこの龍女とミレーネ様はテツヤに抱かれていると思うと身体が熱くなる。

「中には既にミレーネとリーシャが居る。さあ、入るぞ」

メジュリーヌはドアノブに手を掛けて開けた。

ドアを開けると直ぐそこが食事などをする部屋――リビングとなっているが明かりは点いていない。

しかし、直ぐ右の部屋――寝室からは明かりが洩れている。

「さあ行くぞ」

メジュリーヌが私の手を引いて寝室に通じるドアを開けた。

「やっと来たわね」

寝室には薄紫の寝巻を着たミレーネ様と白い寝間着姿のリーシャ殿が居た。

「待たせたな」

テツヤが私とメジュリーヌを中に入れてからドアを閉めて2人に話しかける。

「ええ。待ったわ。お返しに今夜はタツプリと貴方を楽しませるわ」
ミレーネ様は妖艶な笑みを浮かべてテツヤに近付いて唇を重ね合せた。

「ふふふ・・・初心じゃのう」

メジュリーヌは頬を染めて俯く私の耳元に囁いてくる。

「う、うる・・・ひいあつ」

怒ろうとしたがメジュリーヌの手が私の背中をなぞったので悲鳴を上げてしまった。

「可愛い声じゃな。どれ妾が先に味見を・・・」

「おい、変な真似は止めろ」

テツヤがミレーネ様を抱き締めながらメジュリーヌを叱った。

「良いではないか。それともミレーネと共に味わって良いのか？」

「後でな。先ずは俺がする」

そう言ってテツヤは私を抱き寄せて頬を撫でた。

「・・・頂く」

「あ、ああ・・・・・・・・」

私は顔を真っ赤にしながら頷き眼を閉じて唇を差し出した。

テツヤの吐息が近づいてきた・・・・・・・・

温かい吐息で若干煙草臭いし唇は硬かった。

「・・・・・・・・ん」

テツヤと口付けをした。

私は薄らと眼を開けるとテツヤの黒い瞳と合い笑みを浮かべている事が確認できた。

直ぐに離れようとしたが、テツヤは私を抱き締めると・・・・・・・・し、舌を唇を割って入れてきた！！

歯をなぞるようにして閉じていた歯を強引に開けて私の舌を絡ませて来たが、私は思わず舌を噛んでしまった。

しかし、テツヤは自分の血を私の口内に入れて掻き混ぜてくる。

あ、ああ・・・・・・・・

私は膝がガクガクしてくるのを覚えて立って居られない。

それでもテツヤの胸にしがみつくようにして膝を着かないようにした。

どれくらい口付けをしたのだろうか………？

互いに唇が離れた時……銀糸の橋が出来ていた。

「……っは………」

私は口が開いたので思い切り息を吸った。

今まで息を止めていたから尚更だ。

「鼻でしろ。キスをする時は、な」

対してテツヤは平然としており座りこむ私を見下す。

「し、舌をい、入れるなんて………」

「思い切り噛みやがって。血が出たぞ」

「何と……舌を噛んだのか……どれ、妾とミレーネが消毒してやる」

メジュリーヌは私を押し退けるとミレーネ様と共にテツヤと口付けを交わし合った。

さ、ささささ……3人で口付け！！

これに私は驚いたがリーシャ殿は驚きもせずに見ていた。

3人は互いに舌を絡ませ合いキスをしている。

私は唾然として見ていたが、ふいにテツヤが私を見てきた。

それと同時に口付けは終わる。

「さあて・・・抱くか」

そう言うのをベッドに連れて行き下ろした。

「リーシャは待ってろ。先にこいつを抱く」

「はい。勉強させて頂きます」

わ、私で勉強しないで下さい！！

そう叫びたかったが、テツヤの口付けで阻止された。

テツヤは私の唇を吸いながら、慣れた手つきで私の身体の線を撫でて来る。

「・・・ん・・・っあ・・・」

私は僅かに開いた隙間から信じられない声を上げた・・・

こ、こんな・・・厭らしい声を上げるなんて・・・

「随分と可愛らしい声で啼くのう」

メジュリーヌは珍しい物でも見たかのような声を出すのを聞きながら私は何時の間にか寝巻を脱がされていた。

産まれた時と同じ格好でしかも明かりが点いているから否応なく晒される・・・・・・・・

「あ、明かりを・・・・・・・・」

「分かった」

テツヤは直ぐに蠟燭の火を消してくれた。

当たり一面が暗闇に包まれるのに私は何故か・・・よく見えた。

テツヤは裸の私に手を乗せてなぞりながら弄び始める。

触られた部分が酷く・・・感じて私は堪らず声を上げ続ける。

それをテツヤは終始楽しむ。

酷い・・・・・・・・

私を弄んで楽しむなど・・・・・・・・

しかし、それに・・・喜びを見出す自分が居た。

これが好きな男に抱かれる喜びというものか？と自問自答している
と・・・・・・・・

下半身に何か変な感触を覚えた。

見ればテツヤのズボンが大きくなっている。

「まだ早い。もう少し慣らすぞ」

そう言ってテツヤは私をまた慣れた手つきで弄び・・・やがて私は“水”を出した。

ある程度の教育は受けているからそれが何なのかは理解できた。

そして今度はテツヤの番である事も・・・

テツヤもまた裸になり私の下半身に自身の下半身を密着させた。

「い、い・・・たっい・・・」

「我慢しろ。直ぐに終わる」

私は呻いたがテツヤは宥めるように言うのと更に密着させていく・・・

何かが破れる音がした。

ドロツとした生温い水滴が零れる感覚がするも私はそれより痛みが強く・・・

「い、いたい・・・痛いよお・・・痛い・・・よお・・・」

両の眼から大粒の涙を流した。

「・・・言っただろ？ベッドでしか女は泣かせないと」

テツヤは涼しい顔で言いながらも私の瞳から零れ落ちた涙を舌で舐め取った。

「直ぐ楽にしてやる」

そう言っテテツヤは身体を動かした。

テツヤの言う通り初めこそ痛みしか無かった。

だが、段々と・・・心地よく・・・気持ち良くなった。

「て、テツ、ヤ・・・テツヤ・・・」

私は何度も愛しい男の名を呼びながら後頭部に手を回して唇をせがんだ。

それにテツヤは答えてくれる。

ああ・・・テツヤの唇が・・・

これが男に抱かれるという事か・・・

好きな男に貞操を捧げた。

私は幸せ者だと思う。

これで生涯を独身で通しても構わないと思う反面でずっと一緒に居たいと言う願望もまた持ち始めた。

やがて・・・私は・・・

「も、もう・・・だ、だめ・・・ああ!!」

意識が一瞬だが飛んで行き身体がビクツと震える。

荒い息をしながら私はテツヤを見上げるがテツヤは何を考えているか分からない表情で私を見ている。

「て、テツヤ・・・?」

「さあ、次はリーシャの番じゃ」

私は余韻に浸る時間も無くテツヤから引き離された。

「今度は妾とミレーネでそなたを可愛がるとしよう・・・」

そう言ってメジュリーヌは私の唇を奪った。

「んっ・・・!!」

女同士でキスなどと思うがメジュリーヌは心底楽しそうに笑みを浮かべながら私の舌を弄ぶ。

その横ではリーシャ殿とテツヤが口付けを合わせている。

前まで・・・ほんの前まで私が居た場所なのに・・・

もう別の女が居る、と思うと胸が痛い。

しかし、それを考えている間もメジュリーヌとミレーネ様は私の唇

を吸っている。

リーシャ殿も抱かれると私のように2人に弄ばれた。

私たち2人で遊んだ後はテツヤに抱かれる。

やはり私とリーシャ殿より経験豊富な為か・・・テツヤも楽しんでた。

それが悔しくてもっと上手になりたいとさえ思う。

2人も抱かれると今度は・・・皆でテツヤに抱かれた。

もつとも私とリーシャ殿は3人に色々と弄ばれる事の方が多かったのだが・・・

そして終わると皆で同じベッドに横になり眠った。

女王との決意（前書き）

今度はサラの決意です。

女王の責務の前話で彼女とテツヤが心情を書きました。

女王との決意

俺はメジュリーヌの背に乗りながらイーグルと魔術師のお嬢ちゃんを連れて城へと向かっていた。

隣ではイーグルがお嬢ちゃん相手に何かを話しているが、生憎と興味が無いから聞かないし聞く気も無い。

こいつ等は城へ荷物を取りに行く理由がある。

俺にも理由はある。

花に会う為だ。

とは言っても顔色を窺いに行く訳じゃない。

約束を果たす為だ。

この前――花に呼び出された時、彼女は俺にこう言った。

『私にも何か出来る事があるでしょうか？』

そうやってきた花は少しでも俺の役に立ちたい気持ちと名前だけでまるで存在があるのか無いのか判らない自分に激しい憤りを覚えていた。

確かに正直な話を言えば花はこの内乱が始まってから自分が女王として何をしたのか分からない感じだった。

俺を前線指揮官に任命こそしたが、そこからは何もしていない。

別に俺は彼女が血で汚れるのを見たくない。

寧ろ血で汚れて欲しくないと勝手な気持ちを抱いている。

このままそれを維持して欲しいと願っているのは俺の自己満足に過ぎないのかもしれない……

だが、あの時……俺に頼んだ彼女の眼は明らかに女王としての決断をした眼だった。

きつと何か決断したんだろうな。

リカルドを殺すように命令した時と同じく……

上に立つ者は絶大な権力を持てるが同時に重い決断も強いられる。

それが組織や国の頂点に立つ者が与えられた義務だからだ。

俺もそうだ。

少佐という一つの作戦を任されるだけの権限を与えられている。

だから、全ては俺の判断で作戦は決まる。

つまり部下達の命は俺が握っている事になるんだよ。

最小限で被害を抑えられるようにするのが俺の責務であり義務だ。

花もまたその責務であり義務を果たそうとしている。

ならば・・・それに協力しようじゃねえか。

俺みたいに全身を血と泥で作られた男が花の役に立つなら喜んでしてやる。

そう思いながら煙草を吸いたい気分になった。

あれを吸わない日は殆ど無いな。

女神の抱擁・・・その名の通り女神に抱き締められた気分を味わえる。

俺みたいな男でも女神は抱き締めてくれると言う錯覚を覚えてしまうのは俺の思い過ごしかもしれない。

だが、それでも吸いたいんだよな。

まあ、パリに居た時はジタンを吸っていたが。

などと昔を思い出していると城へと到着した。

メジュリーヌは静かに演習場へ降り立つと人間の姿へと戻った。

「妾はここで待つから用を済ませて参れ」

「分かった」

イーグルとお嬢ちゃんは直ぐに立ち去ったが、俺は礼を言ってから

立ち去ろうとした。

「テツヤ・・・・・・・・」

名を呼ばれ立ち止まる。

「妾はそなたの正妻じゃ。誰を抱こうと気にせん。ただ・・・自分を否定し我慢するのは気に入らん」

「我慢、か・・・やせ我慢は男の意地なんだよ」

「そうかえ・・・まあ、そこがまたそなたの魅力であるがのう」

と言いながらメジュリーヌは俺を見送ってくれた。

城の中へと入り通り掛った使用人に花の居所を訊くと寝室と言われた。

直ぐに寝室まで歩く。

ここは初代国王フォン・ベルトが建てた城だと言うが、何処までが本当なのか分からない。

俺と同じ陸自出身者と言うが、果たしてどんな男だったんだか・・・

更に言えば流浪の民だったという部分も気になる。

流浪の民と言えばジタンの絵柄でもある“ジプシー”を思い浮かべる。

ジプシーは流浪の民で知られているが、北インドに居る“ロマ”もそうだ。

世界最大人数を誇る“クルド”などと世界には安定の地を持たない民族は多い。

そしてそういう民族ほど迫害の歴史が嫌というほどある。

まあ、定住地を持たない・持てないからでもあるが。

もしかしたらここの国民の祖先はそう言った民族から出来たのかもしれないな。

などと考えている間に寝室に到着した。

俺はドアを控え目に叩き「テツヤだ」と言い来た事を伝える。

すると急いで駆け寄る足音が聞こえて来たと同時にドアが開いた。

ドアを開けて俺を迎えてくれたのは綺麗な服——ドレスに身を包んだ花だ。

「よお、女王陛下。相変わらず美しいな」

何時もながら思うが可憐な花と思わずにはいられない。

パリに居る“豊穡の女神”も一度だけこんなドレスを着たがあちらも美しいと……二股を掛けるような思いを馳せてしまった。

「ようこそ。テツヤ殿」

花は俺の手を掴むと勢いよく部屋の中へと招き入れた。

「おいおい、いきなり男の腕を掴んで中へ入れるなんてどうしたんだ？」

軽口を叩きながら言うが花は席を勧めてくれたが俺はそれを謝辞し壁に背中を預けた。

それから他愛ない話をして過ごしたが、直ぐに花は厳しい顔になってみせる。

「テツヤ殿・・・心は決まりました」

「・・・そうか。まあ、そうなると思って俺も来た訳だが」

「私を砦へ連れて行って下さい。そこで・・・演説を首都へ向け行きます」

「・・・もうリカルドを諦めたか」

それは分かっていた。

俺をこの戦いの指揮官に任命した時から。

しかし、確認の為に訊いた。

「はい・・・リカルドをここまで追い詰めたのは私の責任です。そして貴方を指揮官に任命したのもリカルドを止めて欲しいからです」

だが、自分はそれを任命しただけでずっと逃げていたと花は告げた。

「・・・もう逃げたくないのです。あの子が逃げずに立ち向かったのなら、母である私もまた立ち向かいます」

「分かった。あんたは、今・・・やっと女王としての義務を果たすんだ」

「・・・はい。これが私の女王としての義務でありリカルドの母親として出来る事だと思っています」

「では行くか」

無言で頷き花は椅子から腰を上げた。

俺はドアを開けて女王を出し共に歩き始める。

互いに無言で何も話さない。

恐らく花はこの間も後悔している。

どうしてもっと早くリカルドに王位を譲らなかったのか？

どうしてこんな事を起こしてしまったのか？

考えれば幾らでも後悔する理由は出て来る。

俺は必要があるのか分からないのに口を開いた。

「・・・あんたが全て背負い込む必要は無いんだ」

花はえ？と顔を俺に向けた。

「あんたは後悔している。リカルドをあそこまで追い詰めたのは自分だと」

「・・・・・・・・」

花は無言だったが、無言は肯定だ。

「前にも言ったがあんたのせいじゃない。あんたにも責任はあるが本当に罰を受けるのは貴族共さ」

あいつらがリカルドを追い詰めたんだ。

俺たちが迎撃してもう戦うのは嫌だと言っているらしいが・・・そうはいかない。

泣いて命乞いをしようと許さねえ。

自分が犯した罪を償ってもらう。

だが、と思う。

ヴィールングのおっさんも言った通り腐った野郎たちだが貴族であり広大な土地を支配する奴らだ。

そんな奴等を一気に片付けてしまったら混乱する。

そこを考えると首都を奪回しこちらの土台を固めてから・・・始末するのが妥当と言えるか。

ここで会話は終わりまた無言でメジュリーヌの所まで歩いて行く。

メジュリーヌの所へ行くと既にイーグルとお嬢ちゃんが待っていた。

見る限り仲は良さそうだが、昨夜のあれから随分とまあ速い展開だなと思う。

まあ、他人の色恋沙汰には無闇に首を突っ込まないのが妥当と言えるな。

「おお、来たか」

俺を見るなりメジュリーヌは歩み寄り「どうであった？」と訊いてくる。

「・・・決まったようだ」

「そうかえ。些か遅すぎる決意じゃが・・・仕方あるまい」

そう言ってメジュリーヌは花を見たが何も言わなかった。

それからドラゴン姿になり砦――前線基地へと戻って行く。

ここから女王にとっては本当の意味で戦いなのかもしれないと思いつながら俺は煙草を吸いたい欲求にまた駆られた。

酔った妻（前書き）

今回はヴィルヘルムと妻の話です。

まだ彼の妻は出していませんが、キャラのモデルはファイアーエンブレムのセシリアを思い浮かべれば良いですかね・・・・・・？

ついでに彼のモデルは“俺の尻を舐めろ”で有名な「鉄腕ゲッツ」です。

黒騎士物語でもこの台詞は出て来ますが、こちらが元祖です。

どちらも好きですが。 W W W

酔った妻

俺は眼の前で甘えて来る新妻である女に茫然としていた。

「どうしたの？ ヴィルヘルム」

甘い声と香りを惜し気もなく俺に抱き着いてまとわり着かせる妻に俺は何と言えば良いんだ？

今の妻は普段の「私、機嫌が悪いです」みたいな顔ではない。

とても惹かれる艶やかな笑みを浮かべる女だ。

薄桃色の髪に濃紺の瞳がこの時は酷く妖艶に映るのは俺の錯覚か？

っと自己紹介が遅れたな。

俺の名はヴィルヘルム。

ヴィルヘルム・ブリュッヘルだが、またの名を“鉄腕ヴィルヘルム”とも呼ばれている元傭兵にして元貴族だ。

あ、違うな。

元貴族だが返り咲いたんだよ。

伯爵から侯爵に爵位は上がり元の領土十新しい領土が与えられた。

五大陸が統一されてから俺を含めて何かしらの役職などを与えられ

ると同時に家庭を築いた。

誰が統一したか？

野暮な事を訊くな。

もちろん我が王であるタカミ・テツヤ様だ。

現在はサルバーナ王国の新国王とられたが、本人から言わせれば「寝耳に水」らしい。

まさか自分が国王になるなんては夢にも思わなかったらしいが俺から言わせれば当然の結果だ。

あの方は上に立てる人材だし下の者の苦労を誰よりも理解しているから良い政を行える。

だからこそ国王になれたんだよ。

ただの女好きで粗暴な男なら五大陸を統一など出来なかったし、内乱事態も治められなかっただろうからな。

さて、話を戻そう。

俺も内乱から五大陸統一の壮大なる冒険に出た。

もちろん我が愛弟子にしてテツヤ様の奥方の一人であるフィーナもな。

内乱を終結させてから五大陸統一は始まる訳だが、俺は現在の妻と

出会った。

敵同士という物語に出て来そうな展開に驚くだろうが本当だ。

で、妻は敵国の魔術師で構成された魔術師団の長――魔道団の団長だった。

この世界も含めてだが女という事だけでも結構な枷になる。

何でと言えば男と比べて体力など色々と劣るからだ、そんなものは訓練である程度は問題なく出来るし女には女の考えなどがあるんだよ。

それをただ女という理由で差別するのは情けないを越えて冒涇だ。

だが、そんな枷を破壊し高みへと行けた妻は稀有な存在と言える。

その魔道団と俺が指揮するシュヴァルフントは対決したが、その前に俺と妻が対決する事になったんだよ。

いわゆる一騎打ちだ。

向こうから言わせれば負け続きだった事も考えて、ここで士気を向上させようと考えたんだろうな。

しかも相手は剣と槍という向こうから言わせれば“原始的な武器”を使用する野蛮人が相手という侮りもあった筈だ。

だ・が、世の中ってのはそう簡単に事は運べないってのが常なんだよな。

妻は俺に火の玉を投げ付けたが、俺はそれを愛用のツヴァイハンダーで真っ二つにしてみせた。

別に魔法効果を与えたもんじゃない。

ただ鉄を引っ叩いて引き延ばしただけの剣だが、魔術師とかも斬ってきたからその血が効果を生んだのかもしれないな。

そこから俺の獅子奮迅とも言える戦い振りが始まった訳だ。

魔術を繰り出す妻を俺は徹底的に追い詰めて最後は失くした右腕に装着した新しい右腕で妻を地面に叩きつけて物にした。

あん時はもう気分爽快だったぜ。

何せ妻の元婚約者の前で悠々と自軍へ妻を連れて帰ったんだからな。

まあ、その後で目覚めた妻から景気付けとも言える手痛いビンタを喰らったがな。

しかも俺を見て「熊！！」と叫んで大事な息子を蹴ったんだぜ？

幾ら何でも酷いだろ。

それに怒って妻を“女”にした訳だが。

お陰で捕虜時代の妻は事あるごとに俺に怨み事を吐いた。

そりゃそうだろうと思うが、言われると些か腹が立つのも当たり前

だろ？

おまけに俺と元婚約者を常に照らし合わせて俺を虚仮にするんだ。

とは言ってもその元婚約者は妻が俺に汚されたと知るや「死ね。売女！！」と言って本当に妻を殺そうとしたんだから酷いものだ。

自分だって妻以外の女を手当たり次第に食べてたくせに何を言うか。

まあ、そんな奴の末路なんてたかが知れてる。

というか俺が直々にそいつを殺したんだから知っているんだよ。

その内容は敢えて言わないが。

で、そこから妻は俺ら側について共に戦い五大陸を統一する役目を担ったんだ。

それで俺と結婚したという訳だ。

俺自身も妻の処女を奪ったから責任を取らなくては、と馬鹿みたいな考えを起こしたが・・・そうでもしないと一生を独身のままで俺に何かと小言を言いそうだから娶った面もある。

そんな訳で夫婦になったんだが、毎日のように俺に小言を言うんだよな・・・

やれ食べ方が悪いだとか、不潔とか、身体が大き過ぎるとか・・・

だが、ベッドの中じゃ俺の言われた通りにするし大胆な事もするから可愛いもんだ。

しかし、そんな妻だが酒を飲んだ事は無い。

俺が勧めても断固として拒否した妻がどうして酒なんか飲んだんだ？

「ヴィルヘルムー。早くベッドへ行きましょうー」

「お前、酔ってるだろ？」

「酔ってんかないわー。ただ、ワインを1杯飲んだだけよ」

妻は俺の言葉が癪に障ったのか眉を顰めて下から睨み上げて来た。

「ワインを1杯飲んだだけでこれかよ・・・俺以外の男・・・イーグルに見られなくて良かったぜ」

イーグルなんかに見られたらどうなるかは自ずと想像できる。

屋敷の中で飲んだ事に感謝するぜ。

「いーぐる？あの男がどうかしたの？」

「いいや。それじゃ・・・望み通りベッドへ行くでしょう」

俺は両手で妻を抱き上げて寝室へと向かった。

「あ、あの、旦那様、湯は・・・」

使用人の一人が慌てて訊いてくる。

「そうだったな・・・後で良い。どうせ二人して汗まみれになるんだ」

「分かりました・・・・・・・・・・」

それだけ言い俺と妻は寝室へと向かい直す。

寝室に入った妻はストンと下りるや俺の首へ自身の腕を巻き付けて口付けをしてきた。

「んんっ・・・・・・・・・・」

おいおい、かなり情熱的だな。

何時もは俺からしないと駄目なのに・・・酒を飲ませると大胆になるのか。

妻は俺の開いた唇へ自分の舌を入れて絡ませて来る。

中々上手いな。

仕込んだかいがあるってもんだ。

長い口付けを終えた妻は俺の上着などを脱がしに掛った。

「今日は、私が貴方を楽しませてあげる」

「嬉しい言葉だ。何時もそんな風にしてくれると嬉しいんだがな」

「いやよ。だって、貴方は私を無理やり抱いたんですもの。だから、いやよ」

「そういう割にはベッドじゃ俺に縋ってるじゃねえか」

「それはそうよ。だって、貴方が好きなんだもの」

そう言いながら妻は俺の服を脱がせるとベッドへ押し倒し馬乗りになった。

そして自分の衣服を脱ぎ出した。

「貴方は何もしないでね？今夜は私が主人だから」

「何も？そりゃ蛇の生殺しだぜ」

「偶にはそれを味わいがないさい。私は何時もそうなんだから・・・んっ」

妻はまた俺の唇を吸い身体を密着させてきた。

何もするなと言われた以上は従うとしよう。

これも一興だ。

だが、妻は何が不満なのか俺から離れて怒ってきた。

「何で抱き締めないの？！」

「何もするなと言ったのはお前だぞ」

「私を抱き締めてくれないなんて酷いわ！何時も私を抱き締めてくれるのに・・・・・・・・！！！」

酒癖が悪いのも考えものだが、この場合は良しだ。

「悪い悪い」

軽い口調で謝りながら俺は妻を抱き締めた。

それに満足した妻はまた口付けを再開する。

まったく我儘な妻だ。

しかし、そういう所が新鮮で可愛いもんだと思いつつ俺は妻に思う存分、身体を貪られた。

で、その翌日に目覚めた妻から「私に何をさせたのよ！！」と言われてビンタをされた・・・・・・・・

自分でやると言ってたくせにこれかよ、と思うが・・・・今度、酒を飲ませてこうしようと思う。

捕虜獲得（前書き）

こっちは第二百二十三章の別バージョンです。

どっちにするか迷いましたが、あちらにしました。

とは言っても、こっちを捨てるのは勿体ないと思いました。（汗）

捕虜獲得

森の中に入り進んで行くが血の臭いが凄く猟犬ではないが鼻がもげそうだと思ってしまった。

誰の血か判らない程に辺り一面・・・血の海。

それだけ激戦が繰り広げられたんだと思わずにはいられない。

こんな光景を見たのはヴァイガーで初めて行った防衛線の時だと昔を思い出す。

そんな昔ではないが遙か昔に思えたのは気のせいか？と思いながらこれでは猟犬の鼻が効かないのも頷ける。

私たちは2人を見た場所に到着したが、そこにも死体がゴロゴロ石のように転がっておりとてもじゃないが遺族に見せれる死体は無い。

大半が猟犬の牙と爪で殺された悲惨な死体だ。

その中にはやはり彼等は居ない。

「・・・見つけた」

山犬が地面に片膝を着いて一つの足跡を見て言うので私も真似して彼女が見つめる方角を見た。

確かに2人分の足跡がある。

その片方は足を引き摺っているから間違いない。

「あっちだと何かあるかい？」

まだここ周辺を完全に熟知している訳ではないから山犬に訊ねた。

「確か・・・洞窟があったね。しかもご丁寧に2人くらいは入れる大きさだよ」

「・・・そこに居る可能性は高いね」

私はAKS-74Uのレシーバーを引いて初弾を装填した。

「これより2人を探す。傷を負っているが油断はするな」

私の放った言葉に山犬と猟犬は頷いた。

それから足跡を追い掛けて進む。

どれくらい進んだかは不明だが猟犬が「そろそろ良い」と言ったので彼を先頭に立たせて臭いを嗅がせ始める。

彼は四つん這いになり犬のように鼻先を地面へ押し付けて、ゆっくりと臭いを追い掛けた。

それを私と山犬は追うが誰も言葉を放たない。

静寂が私達を包み込むが、その静寂がひどく心地よかった。

ふと猟犬の足が止まった。

「どうしたんだい？」

私が訊ねると猟犬は無言で指を前に指した。

そこには洞窟があり血が雪を赤く染めている……………

「あそこに居るのかな……………」

「臭いはする。それでどうする。我が乗り込んで殺すか？それとも手榴弾を投げ込んで生き埋めにするか？」

「…………中に入って確認しよう」

「危険だぞ」

「知っているよ。それでも私が撃ち漏らしたんだ。なら、止めを刺しそれを確認するのも私の役目だ」

違うかい？と訊けば猟犬は「そうだな」と頷いた。

「私が先頭に立つ」

「猟犬を先頭にした方が……………」

山犬が言ってきたが私は首を横に振った。

「あの時、私が撃たなかったからこんな状態になったんだ。だから私が先頭に立ち彼等が生きているなら私が止めを刺す」

そしてそれを見届ける。

それが私なりのケジメだ。

「・・・分かった。だけど、次はあたしだよ」

山犬は観測手だ。

本来なら観測手が狙撃手の戦果を確認するのが義務だ。

だから彼女が言いたい事も私は理解できた。

「分かった。だけど、決して危ない事はしないように」

「その言葉をそっくり返すよ」

これには苦笑してしまうが、直ぐに顔を引き締めて中へ入った。

猟犬は外で取り逃がした場合の事を考えて待機させておく。

洞窟の中は暗いがライトを点ければ問題ない。

とは言えやはりライトだけでは完全に全てを照らす事は出来ないがそれでも無いよりはマシだ。

洞窟の内部は1人が通れる位の狭さだった。

おまけにライトを点けても暗いから出会い頭で敵と鉢合わせになる可能性だってある。

こんな場所こそショットガンを持つヴィン・ルビーの出番だろうと思いつつ左手にライトを持ち右手でAKS-74Uを持ち進んで行く。

進んで行くと声が聞こえてきた。

『寒いぜ・・・相棒』

『心配するな。必ず助けは来る。だから耐えろ』

どちらも男の声で年齢は20代前半の声だが、片方の声は明らかに弱り切っている。

足をやられた男に違いない。

私はライトを消す前に山犬へ「敵が居る」と手で言った。

山犬は頷き音を最小限に抑えるのを確認してから私は歩みを再開したが、その間も会話は続いている。

『何だか手の感覚が感じなくなってきた・・・・・・・・』

『ちくしょう・・・あのスキン・ヘッドが。蛇の差し金だと判っているのに何も出来ないなんて・・・・・・・・』

『くそつたれ・・・今度は眼が霞んできやがった』

『シツカリしろ。待ってろ。もう少し薪を取って来る』

片方の声は励ましの言葉を言い武器を取る音を残し気配が消えた。

別の入口があったのか？

しかし、今すぐ確認するのは危険だ。

少し時間を置いてから行かなくては……………

私たちは少し待ってから明かりがする場所へ慎重に入った。

そこには男が1人居た。

左足の太腿に包帯を巻いているが赤く染まっており直ぐに代わりを必要としている。

彼が負傷した男だと直ぐに判った。

彼は私と山犬が入ってきた事に気付かないのか眼を閉じて寝ている。

今なら…………殺せる…………少し力を入れたら弾が出て殺せる。

近距離だから弾は確実に当たり肉を切り裂き内臓をグチャグチャに出来るが、私は銃口を下ろした。

殺せる…………殺せるのだが、どうしてか分からないが引き金が引けなかった。

・狙撃する時は、他の奴の場合は躊躇いなく引けたのに……………

彼と…………初めて狙撃した相手と重なっているのかもしれない。

今の状況とあの状況は似ている。

どちらも重傷を負い寒がっており言葉は発していないが、楽になりたいと身体で言っている気がした。

・・・殺せない・・・この糞が・・・

私は自分が酷く情けなく思えた。

2日前までは狙撃が出来たのに・・・今は出来ない。

それがとても情けなかった。

「リンクス、どうしたの？」

山犬が私の様子が可笑しいと判り肩を叩いてきた。

それに答えようとした時に銃声が外からした。

コルトXM177E2の銃声だ。

「行こうっ」

私はこの男を殺さずに外へ出た・・・逃げたのだ。

苦々しい思いを胸に抱きながら外に出ると猟犬が男――20代前半の青年の首を絞めている場面に出くわした。

「こいつがもう1人だ」

獵犬は私と山犬を片眼で見て言い更に力を込めた。

後もう少しで死ぬだろう。

「お、俺の相棒を助けて、くれっ」

青年は苦しいながらも私に懇願してきた。

「悪いが我が主からそなた等は皆殺しにしろと言われているので無理だ」

獵犬が最後の力を込めようとすると彼はこう言った。

「お、お前の、上官は、恩を仇で返す気か?！」

俺の上官はあの男を一度見逃したんだぞ、と更に言い彼はジタバタと暴れた。

確かに彼の上官――クルセイダー大佐は少佐を故意に逃がしたから助けたという事になる。

彼はそれを自分達で恩を返してもらおうとしているようだ。

どうする・・・・・・・・・・

皆殺しにしろ、と私たちは言われた・・・だが、彼の言う事はある意味では的を射ている。

何より私はあの男を殺せなかった。

猟犬なら迷わず殺せるだろう。

この場で猟犬に任せれば万事丸く収まるが、それでは胸に抱いた胸糞悪い気持ちは消える事が無い。

「・・・少佐に連絡しよう」

私は猟犬に無線機を頼むと言った。

「リンクス。貴様は我が主の命令を無視する気か」

猟犬は私を憎悪の眼差しで睨み据えた。

「違うよ。だけど、彼の言い分も尤もだよ」

「だから何だ。我は主の命令を遂行するだけだ。それに貴様、まだ殺していないだろ」

洞窟に居る奴を、と言われて私は頷いた。

「してないよ・・・出来なかった」

「だからこの男が言った事を利用して助けようと言うのか？」

「それもある。だけど、捕虜にすれば情報も手に入る。私たちが知らない情報を持っている筈だよ」

「喋らなかったらどうする」

「その時は・・・私が責任を持って始末を着ける」

「・・・良いだろう。主へ連絡しろ」

猟犬は私を真っ直ぐに見つめたが直ぐに納得し無線機を渡してくれた。

私はそれに礼を述べて少佐に連絡する。

『・・・なるほど』

少佐の声は何時も以上に錆ついた声に聞こえた。

感情がまるで込められていないから怒っているのかどうか判らない。

「・・・・・・・・」

私は無言で少佐の返事を待った。

『そいつ等を連れて来い。お前の言い分も尤もだ。ただし・・・万が一の時はお前の手で責任を取れ』

「勿論です」

感情を込めずに私は了承した。

『では連れて来い。以上だ』

無線を終えた私は猟犬に連れて来いと言った。

「分かった。運が良いな。小僧」

獬犬は青年の腹に拳を打ち込んで気絶させた。

それからまた私を見た。

「リンクス。我はそなたと山犬の護衛兼通信手だ。だが、その前に我はタカミ・テツヤ様の忠実なる下僕だ。もし、そなたが責任を取れず我が主の害になると判断したらその場で殺す」

覚えておけ、と言われ私は重々しく頷く。

「覚えておくよ。私もまだ死にたくはないからね」

それから洞窟の青年も出して前線基地へと戻った。

狐の恋（前書き）

フォックスことヘン・ロビンソンの話です。

ランドルフに言おうとした続きであり、この先のちよつと先を描きました。

苦勞人である彼の半ば愚痴みたいな感じですが、どうぞ。 W W W

狐の恋

俺は眼の前で口を開いた娘——付き合っていた彼女から言われた言葉が理解できなかった。

「私、結婚するの。相手は地方の伯爵なの」

彼女は俺が理解できないと知ったのか二度言った。

「け、結婚って、まだ君は……………」

「もう16歳だから結婚できるし子供も産めるわ」

「いや、そうじゃなくて……………」

「…………父に言われたの」

『何時まで平民風情と付き合っている。お前には相応しい相手が居る』

ギョッ……………」

俺は拳を握り締めた。

あの糞爺が……………」

俺が平民だからって何だよ。

…………俺は平民で彼女は貴族。

彼女の父親は貴族で彼女はその娘だ。

父親の爵位は五階級の下から二番目に位置する子爵。

彼女が結婚する相手は伯爵・・・しかも地方―――辺境だから通常の伯爵より上の“辺境伯爵”に位置する。

明らかに政略結婚だ。

今すぐにでも俺はその結婚を決めた彼女の親父を殴りたかった。

俺と彼女は付き合っている。

平民と貴族だが階級が何だ？

身分の差が何だ？

俺と彼女は愛し合っているんだ。

それなのにどうして別れないといけないんだ！！

「俺と一緒に逃げよう」

俺は拳を開いて彼女の手を握ろうとした。

しかし・・・・・・

パッ

差し出した手は虚しく空を掴んだ。

叩かれて方向違いの所を掴んだんだ。

「・・・触らないで。私と貴方とでは所詮・・・住む世界が違うのよ」

「・・・本気で言っているのか？」

嘘だ・・・嘘だと言ってくれ。

頼む・・・

「本気よ。それに相手は私より4歳年上だから歳の差も無いわ。それにそこで栽培される葡萄酒は高く売れるの」

貴方が一生かかっても稼げない金額よ、と彼女は言った。

「俺より、金を選ぶのか・・・？」

「言ったでしょ。所詮あなたと私とでは住む世界が違うの」

だからもう終わりだ、と彼女は言い背を向けて待たせてあった馬車に乗り込んで去ってしまった。

雨が降り出し俺を容赦なく打つ。

彼女は屋根付きの馬車に乗れるが俺は乗れない。

平民で実家は食料雑貨屋だからだ。

「・・・・・・・・」

俺は何も言えずにその場から立ち去った。

それから数日後・・・彼女は嫁いで行ってしまった・・・

— — — — —
「何で思い出したんだか」

俺は1人になった事で息を吐いた。

ランドルフ君に話した知り合いってのは当時若造だった俺が付き合っていた子爵家の娘だ。

もう大昔の事で思い出すのも馬鹿馬鹿しい。

今にして思えば俺は食料雑貨屋の息子で向こうは子爵家の箱入り娘。

どう考えても身分の差があり過ぎる。

歳を取ると若い頃は馬鹿な真似をしたなと思えるんだよな。

実年齢に合わない発言かもしれないが、生憎と今の仕事に就くまでは苦勞したんだ。

今でも苦勞しているが。

とは言っても年下の面倒を見るのは年上の役目だ。

お陰で結婚する時期を逃がしたなど同僚に言われる事はある。

まあ、願望はあるんだよ。

両親が死んで手放した店だが、結婚したら買い返して商売したいんだ。

一生軍人をする、と考えた時もあるがやはり親の職業を継ぎたいんだよ。

特に俺なんかは一人息子だから余計に考えてしまう。

話を戻すと中立を保っている可能性があるのはその元恋人であり現伯爵夫人だ。

噂では結婚して僅か数年で夫と死別し姑と暮らしていたが、その姑もまた死んでしまい使用人達と暮らしていると聞いている。

その現伯爵夫人が統治している領土に兵は居ない。

この国は貴族にも兵を持つ権利はある。

何せ暴動が起きたら、山賊が横暴したら、と考えれば兵を持つ事は必然だろ？

しかし、どういう訳かあの伯爵は兵を持たない。

そんな所なら山賊達が行くと思う筈だがどういう訳か行かないんだよな。

おまけに暴動も統治が良いのか起きていない。

つまりこの内乱に参加するだけの利益が見つけられないと考えられる。

だから中立を取ると俺は考えている。

首都を奪回すればリカルド王子は当然の様に古巣へと逃げ帰る筈だから俺達もまたそれを追い掛けて殺す。

そうなると補給などを考えないといけない。

となれば中立の場所で補給するしかないんだよな。

もし・・・俺の予想が的中してそこでしか補給できないとなったら・・・

「会うしかない、よな？」

いや、俺が会う必要は無いんだが時と場合によっては会わなければならない。

何て言う？

『よお、久し振りだな』

なんて言うのか？

いやそれ以前に向こうは俺の事を覚えているのかさえ疑わしい。

考えてもみろ。

もう十年以上も会って居ないんだぞ。

十年も会わなければ顔も忘れる。

俺は覚えているが、女は別れた男などその日の内に忘れるというのが経験上で解かっている。

それが現実的なんだ。

それなのに俺は未だに彼女の顔を、声を覚えているから情けない。

彼女と別れてからも他の女性と付き合ったりはしたが、どうしても男女には相性がある。

テツヤの言葉を借りるなら「銃と一緒に」だ。

銃にも相性があるように女もまた相性がある訳なんだよ。

で、付き合いはしたが長続きしない。

相性の問題もあるだろうが、俺の仕事が問題でもあるんだよ・・・

彼女と別れてから俺は直ぐにヴァーリング隊長に見込まれて軍に入隊した。

仕事内容は偵察、情報収集、味方作りと地味で泥臭い内容だが重要な仕事だ。

しかし、これはそう簡単に身内にさえ言えない内容だし命令があれば直ぐに行きいつ帰れるかも分からない。

そこが難点なんだよ。

お陰で何時も別れる言葉は決まってこれだ。

『仕事と私、どっちが大切なの？』

何時もこれを言われて平手打ちをされる。

俺としてはどちらも大切だ。

しかし、女って生き物は「私と言って」というのがお好みなんだ。

仕事のせいにするのはどうかと思うが、もし普通の仕事――食料雑貨屋だったらどうだろうか？と思う。

「はぁ・・・くだらねえ」

こんな事を考える時点で頭がどうかしている証拠だ。

俺は女神の抱擁を銜えて火を点け煙を吐いた。

これは本当に女神に抱き締められる錯覚を覚える。

もし、女神が居るなら直ぐ横に・・・俺を抱き締めている。

ああ・・・俺にも何時か、女神が来てくれるだろうか？

もう直ぐに三十になるから結婚したい。

とは言え先ずは目の前の問題――内乱を何とかしないといけないが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8710w/>

傭兵の国盗り物語 短編集

2011年11月30日22時47分発行